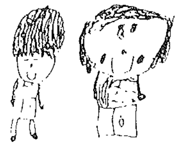
横浜市小児科医会ニュース



No. 19　1999年10月1日

時　言

日本小児科医会セミナー

神奈川小児科医会会長

相　見　基　次

医会ニュースでも御知らせしたように，日本小児科医会は学会と同じく全国を7ブロックに分け，毎年持ち廻りでセミナーを開催している。今年は近畿で京都，来年は九州で鹿児島，再来年つまり2001年は順番が関東地区に戻ってくる。関東といえば東京はすんだので次は神奈川県でと要請された。幹事会に計ったところ順番では止むを得ないと言うので引き受ける事になった。引き受けた以上は21世紀の初頭を飾るものとして立派に成功させたい。会員各位の御声援と御協力を切にお願いする次第である。

小児科医会セミナーは小児科学会の学術集会とは違うものであって，それに張り合う様な，それに追いつけ追い越せというものではない。医会らしいセミナーにしたいものだと思っている。

会場は，やはり横浜MM21地区とだれしも考えるところで講演会場はパシフィコヨコハマに，各種会議懇親会は日航ホテルに決めた。

日時の決定には紆余曲折がありホテルは結婚式のない仏滅の日に貸したい。しかし2年先の仏滅は神社庁が決めるのでそれが中々発表にならない上，医会の方では日だけでも早く知らせろというので一寸気になったが，大体小児科学会学術集会の1ヶ月後が恒例であるとのことで2001年，平成13年6月16，17日に決め，日航ホテル宴会棟を全館予約した。勿論，セミナーに数多くの参加を得るためには演題にあると思う。全国から診療を休み参加費を払って出席してもらうためには聞きにいきたいと意欲を催す講演，又はシンポジウムを催したい。それは何か，みなさんの御知恵を拝借したい。

日本小児科医会では，1,000名の参加を予定してくれと言っている。それには数多くの会員が多くのセクションで御協力願わねばならない。派手な事をする必要はないが心に残るセミナーにしたい。神奈川県はそこで暮らしている我々には感じないが，全国的に見れば小児医療及び医療制度の先進県とし，注目を浴びている。重ねて会員各位の物心両面に亘る御支援を切に御願いする次第である。

二つの提言

(17)

予防接種率の向上について

予防注射接種率の向上を目指して

横浜市立大学医学部小児科教授
横　田　俊　平

予防接種はある意味で人類が獲得したもっとも先進的な「医薬品」である。疾病が発生する前に処置することにより感染防御が可能となり，疫病から免れることになる。結果的に医療費の抑制に多大な貢献ができる医療技術でもある。平成6年の予防接種法の改正は強圧的な集団接種から，こどもの健康状態に応じた個別接種への移行が眼目であったのだが，感染症の状況変化に加え，親がこどもの健康に責任をもつという意識改革の側面があったことも否定できない。

移行期にはいくつかの重大な問題が生じた。そのひとつは風疹の予防接種で，それまで中学2年生の女児に限って行っていたものが，乳幼児の男児・女児に行うようになったために，その中間の年齢の児童・学童が未接種のまま成長してしまう事態となった。もちろん移行措置は行われてはいたが，小学校高学年，中学生が保護者とともに個別接種に向かうことは，現在の状況ではたいへん困難なことであるはずであった。案の定，とくに都市部での風疹ワクチン接種率は軒並み一桁に低下した。当時未接種で経緯した中学生は5年たちすでに妊娠年齢に達している。先天性風疹症候群の増加を憂えているのは私だけではないだろう。ひとつの光明は乳幼児の風疹ワクチン接種率が90%台を維持していることである。乳幼児の抗体保有が高値であれば，風疹の大きな流行は阻止できる可能性がある。実際，その周期性から平成9年は風疹の流行年であったが，大きな流行はみられなかった。この考え方が誤っていないことを念じている。

いずれにしても麻疹や風疹の流行は「集団の免疫」に依存していることは確かで，そうならば集団の免疫状況をモニターすることが流行予測には必須のことだろう。しかし昨今，健康児から採血し抗体検索を行うことなど不可能に近い。そこで県立看護短大の市川誠一教授と私たちは尿を用いた風疹抗体の測定方法を開発した。健常人ならば尿蛋白は陰性のはず，と思うのは誤りで，抗体の一部は絶えず尿から排泄されているのである。血清抗体価と尿中抗体価はたいへんよく相関し，感度97.9%，特異度100%という高い一致率である。現在神奈川県内の某保健所，某小児科医会，某市行政の援助を得て，パイロット・スタディを実施している。いずれ全県的に尿中風疹抗体検査が行われるようになり，各地域の風疹抗体保有率は毎年数値で表され，予防接種の効果を確認し，あるいは接種率の向上に役立てられる日が来ることを夢みているこの頃である。

青葉区　渡　辺　昭　彦

平成7年4月に法改正がおこなわれて早や4年を経過した。その間色々な問題点が現場で指摘されて来たが，ここでは予防接種率の現状をふりかえり，今後の展望と私見もまじえて述べてみたい。義務接種から勧奨接種へ，そして集団から個別が原則となることにより，接種率は低下するであろうことは，改正前より当然予測されていたことではあった。横浜市の場合，衛生局でまとめた実施成績を見ると，平成6年度の集団に比べて，新法下での平成7年度ではあきらかな接種率の低下がみ

られた。（母集団の取り方に問題があるので，本当の意味での接種率ではないが，統計的に処理した適切な「接種率」に関しては，日本外来小児科学会の有志によって現在，研究とデータ集積が進行中であることを付記する。）個々の数字の詳細は省略し，ここでは接種率を向上させるためにはどうしたらよいかを少々言及してみたい。横浜市の場合，法改正前にすでに乳幼児の三混，麻しんは個別接種になっていて接種率はきわめて良好（95%以上）であるので，平成７年度から集団より個別に切り替った。風しん，日脳Ⅰ期は問題なく，乳幼児期の三混，麻しん並みの良い接種率に近づくであろう。問題は学童期におこなう定期予防接種，即ち日脳Ⅱ期（小４），二混Ⅱ期（小６）そして日脳Ⅲ期（中２）の接種率の低さである。市衛生局は学校を通して，接種該当学年の年度頭初に，児童生徒全員に通知と接種券を配布している。この方法は，直接保健所が家庭に配布（郵送）するよりも，児に親とともに接種の意義を考えさせるという意味において，妥当であると私は考える。では学校医はどんな形でかかわり合い，接種率向上に役割をはたすことが出来るだろうか。色んな方法が考えられると思うが私が小学校で行っている方法は，一学期終りの学校保健委員会のテーマの一つに毎年小４，小６に日脳Ⅱ期，二混を中心に予防注射に関する発表をさせるようにしていることである。第二は，今回の改正で，すべての接種対象年齢が７歳半（90ケ月）にきれいに並んだことに着目し，これを接種率向上に役立てるようにしてはどうか。即ち，毎年２月に行われる小学校入学前説明会（保護者の出席率が一番良いと聞く）に，校医として出席し保護者に挨拶方々，『今日，家に帰ったら，お子さんの母子手帳を取り出して，定期予防接種がすべて済んでいるかどうかを必ず点検していただきたい。済んでいないものがあったら，入学前に（遅くとも７歳半迄に）済ませるよう勧めます。特に三混と日脳は乳幼児の基礎免疫を済ませておかないと小・中学校に入ってから追加接種１回やるだけでは意味がないのです。……』などと保護者となごやかに話しながら，あらかじめ私が作った予防接種チェックリストを渡し宿題を出すことを毎年実行している。効果はきわめて良いという感触を得ている。こうすることによって，個別勧奨になっても限りなく皆接種に近ずけて行けるのではないかと考えてやっているが，会員諸氏の御批判をいただければ幸である。

（参考文献）渡辺昭彦：新予防接種法での接種率，モダンフィジシャン，379～382，新興医学出版社1997

研修会抄録

「最近の感染症の話題と治療」

北里大学医学部感染症学　　砂　川　慶　介

半世紀前に我が国でペニシリンが発売されて以来，抗生物質の開発は目覚ましい進歩をとげ，多くの病原細菌による感染症の治療に多大の貢献を果たしてきた。

またジフテリア，破傷風，百日咳の三種混合ワクチン，麻疹，風疹，ポリオなどのウイルス性疾患に対するワクチンの普及で感染症の発症予防にも成果をあげ，衛生水準の著しい向上とともに伝染性疾患は制圧されたかの感があった。

しかし最近の診断・検査技術の進歩による新しい病原微生物の発見，免疫機能低下症例の増加，抗菌薬の乱用とも思える使用，海外との交流の活発化，地球の環境破壊などの理由によって新しい微生物の発見，海外からの感染症の侵入，薬剤耐性菌の出現など新興・再興感染症の脅威がマスコミに取り上げられ，感染症に対する社会の関心が再びたかまりつつある中で発布以来100年を経過した「伝染病予防法」では対応の出来ない疾患の増加，猩紅熱など医療の進歩で対応が異なる疾患の増加，人権への配慮不足が指摘されてきた。

そこで昨年10月に新しい「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」が公布され，本年4月に施行された。

この研修会では新しい法律についての解説ならびに，最近話題のペニシリン耐性肺炎球菌感染症について紹介し，最後に抗生物質の選択について考えを述べた。

感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律

平成10年10月に感染症患者の人権を尊重しつつ適正な医療を提供し，かつ感染症に対して迅速な対応が可能となるように従来の「伝染病予防法」，「性病予防法」，「後天性免疫不全症候群の予防に関する法律」にかわるものとして新法が公布された。

感染症の分類は感染力，危険性，対応に応じて4類に分類され，第一類は感染症力が強く，重篤となる疾患で特殊の医療機関でのみ対応が可能なもの，第二類は従来の伝染病のうち感染症が強く重篤なもの，第三類はO－157のように特定の職業への就業によって集団発生を起こしうる感染症，第4類はその他の感染症が該当する。

4類感染症は更にインフルエンザや性感染症など，「特定感染症予防指針」を作成しなければならない感染症，7日以内に届け出が必要な感染症に分けられている。

届け出に関しては，発生数が多い疾患は定点把握感染症として，少ないものは全数把握感染症として扱われることになり，届け出も強く要請されている。

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

最近ペニシリン耐性肺炎球菌（PRSP）による難治性の中耳炎，呼吸器感染が増加し注目されている。PRSPは経口抗菌薬では除菌が困難であり，外来の治療に限界があることから今後問題となることが憂慮されている。

ペニシリン耐性研究会が全国から収集した肺炎球菌の薬剤感受性を調査したところ，経口薬ではメイアクト，ファロムが最も効果が期待される薬剤であり，難治例では注射剤のカルベニンでの治療が必要である。

今後PRSPによる化膿性髄膜炎の増加が予想され，通常使用されるβ－ラクタム薬では難治となることが危惧されている。

外来に用意したい抗生物質

抗生物質の選択にあたって考慮すべき事項としては，抗菌力，体内動態，安全性がある。抗菌力では原因菌を想定する必要があり，中耳炎や呼吸器感染症ではPRSPを考慮した選択が必要になる。

体内動態としては腸管からの吸収の良さや病巣への移行が問題となる。ペントレックスやエリスロシンは吸収の面で問題がある。腸管感染症ではホスミシンのようなグラム陰性菌に有効でかつ吸収の悪い薬剤が良い。

安全性ではニューキノロンは関節障害の面，テトラサイクリンは骨や歯への沈着の面から小児には第一選択薬とはならない。この他乳児では下痢も問題となる。

この他に小児では服用性も重要な問題である。味やにおいの他に粒子の大きさ，１回の服用量も薬剤によって異なるので理解しておく必要がある。

小児での使用機会の多いセフェム，マクロライドについて言えば抗菌力から選べたメイアクト，クラリス，服用性からはセフゾン，リカマイシンが，下痢の少なさからはバナン，リカマイシンが優れているので，この点を考慮した選択が重要である。

医会通信

４月の総会の演題は八木先生のお骨折りで，砂川先生の「最近の感染症の話題と治療」をお願いしました。従来の伝染病予防法に代わる，一寸解りずらい所謂「感染症新法」の４月施行に伴う時期を得た演題で，お話は大変解り易く，日常の診療にすぐ役に立つ抗生物質等の話題を交えたもので，好評でした。又５月の産科・小児科研究会も有本先生のご協力で，黒木先生の「日常診療に必要な遺伝カウンセリングの基本」のお話で，産婦人科・小児科の先生方が大勢参加されこれもまた盛況でした。

又横浜市医師会では「横浜市医師会史・第６巻［平成元年度～平成10年度］平成12年12月発刊予定」を企画して横浜市小児科医会史に執筆を依頼してきました。締切は一応７月末でしたので，各部医会会長宛に各部小児科医会史の執筆依頼を７月初旬に出させていただきました。勿論市小児科医会としても執筆致しますが，横浜の各部小児科医会は独特の歴史を持ち，夫々立派な業績を持たれておりますので，（西部小児科懇話会では７月に第200回の例会を持たれた様です）是非これに参加され執筆して頂きたいと思います。

「会長を今記限り，次ぎの若い先生方へ」と今年４月の総会でお約束し，常任幹事会で出来るだけ各部医会の考えを吸収する為，新しい常任幹事３名と副会長１名の増員をご承認頂いたので，５月の常任幹事会は前にも増して賑やかに活発になりました。次は９月の予定です。若い先生方の活躍とベテランの尚一層のご協力を期待しております。

昨今（７月20日）の報道によりますと，世界の人口は60億になり，それも数時間に十万人単位で増加しています。日本の総人口は現在約１億３千万，50年後には１億50万人に減りますが老年人口（65歳以上）はどんどん増加し，約３千２百万人と倍になるとのことです。少子高齢化はどんどん進んでおり，今年１月神奈川県の総人口は839万余人で，14歳以下の年少人口は前年度比0.2ポイント低下の14.3%で過去最低に，そして老年人口は過去最高を更新したとの事です。年少人口比率の高い順に①都筑区19.9%②愛川町，③青葉区16.4%そして低い順に①西区11.1%②鎌倉市となっています。総務庁の人口推計（98.10.1）よると，わが国では既に老人人口が年少人口を超えており，神奈川県でも２年で同じように逆転するとされています。こんな時代に於いてこそ，我々小児科医は少子化対策を含めて，時間をかけた更に質の良い診療をして行かねばなりません。

（会長　三澤　孔明）

「横浜市小児科・産婦人科医会合同幹事会」について

平成10年10月28日
於　「キムラ」

横浜市小児科医会，三澤孔明会長の呼びかけで，同，合同幹事会が開催された。長い歴史と堅固な組織を持つ，横浜市産婦人科医会より，今後の医会運営に於ける参考にするための意見を交換したい旨が，矢崎茂義幹事より提示された。

参会者の紹介の後に，産婦人科医会の八十島唯一会長より医会の歴史，組織紹介を。また，主に学術部門を東條龍太郎幹事が紹介し，浜野穆幹事が補足を行った。

要旨　①　30数年前に「仲良し勉強会」として発足し現在340数名の会員を有す。
②　年に10回以上学術講演会等を開催してきた。
③　各回の演題はテーマ選定基準を作成し，実施している。
④　日本産婦人科学会地方会等の母体組織と合同事業も施行している。
⑤　年会費は1人5000円のみで，各主催毎に，協賛会社が経済的支援を行っている。
⑥　講演会参加者は60～70名が現在は50名前後に至っている。

次いで小児科医会より説明があった。

要旨　①　昭和30年代より各地区で，小児科診療を行っている医師集団ができ小児科懇親会となった。
②　名称変更により小児科医会になった。
③　小児科専門医の他に内科系の医師の参加がある。
④　組織的な活動も緒についたばかりである。

その後，「乳児検診」の話題が問題点として挙げられた。

①　1ヵ月検診は現在産婦人科の医療機関にて実施されていることが多いが未実施の検診票には医療機関の印を押さないこと。
②　今後，どの様に小児の検診に於て産婦人科→小児科への移行をするかが論じられた。

次回の会合を期して閉会となった。

（文責　小児科医会　向山　秀樹）

第7回横浜市産婦人科小児科研究会の御案内

先の見えない少産，少子の傾向が少しでも改善されることを希い，両科が協力し，此会の発展と成果が期待されます。胎内で芽生えた命は羊水の中で音を聞き，五感が少しづつ目覚めます。そして，出産後母の懐で哺育されながら感覚が発達していく様です。

今回は両科にまたがるテーマとして赤ちゃんの感覚発達の驚異と最近の新生児哺育をとりあげました。是非，多数お誘いの上御参加下さる様御案内申し上げます。

◦日　時　平成11年12月10日（金）午後7時～9時
◦場　所　横浜市健康福祉総合センター　4Fホール
◦演　題　「胎内に始る赤ちゃんの感覚発達の新しいケアとカンガルー哺育について」
◦講　師　聖マリアンナ医大西部病院周産期センター　堀内　　勁

（文責　有本　泰造）

医会だより

北部小児科医会

8月25日（水）青葉区医師会ホールに於て，平成11年度横浜市北部小児科医会総会が開催された。

出席者約30名。４名の新入会の先生の紹介があり，これから仲間に入り，一緒に協力し地域のよりよい小児医療に加わりたいとの気持が述べられた。

次いで議題に入る。

1　平成10年度，事業報告，会計報告。
2　平成11年度役員人事の件。
3　北部小児科医会外来談話会の件。
4　保健所乳幼児健診協力出動割当。
5　健診，予防接種，文書等自費料金調査。
6　保健所BCG接種協力出動の件。
7　第６回北部小児科医会学術研修会。
8　その他。

上記の中の主なものを記す。議題２で平成11年度役員人事の件につき，会長有本泰造，副会長渡辺昭彦，会計幹事吉田京子は会の更なる発展とリフレッシュメントをめざし今回退任することになった。

後任の選出は話し合いの中で新会長に入戸野博，副会長に太田恵蔵，古井民一郎，殿内　力の三先生が選出された。

今後は入戸野先生を中心として，出来るだけ皆で会の行事に参加，協力してやっていこうと云うことになった。

議題３の北部小児科外来談話会は今年３月に始り年４回位，会員同志，気楽な外来症例検討交流会の様なものを開き，次回は10月となった。

議題７の第６回北部小児科医会学術研修会は11月に都筑区が担当し，結核をテーマに準備されることになった。

終りに小生がこれからは入戸野先生を中心として人の和を大切に，仲良く発展していくことを希っていることを述べ，和気あいあいのうちに閉会となった。私が退席した後も多くの会員の歓談が何時迄も続いた様であった。　以上

（有本　泰造）

東部小児科医会

平成11年度前期は下記のとうりの学術活動を行いました。

第20回（平成11年３月11日：鶴見医歯会館）小児の慢性疲労症候群：日本医大小児科　伊藤保彦先生。ちょっと聞き慣れない疾患概念ですが，今までいわゆる起立性調節障害と片付けられていたこども達の中に，詳しく調べてみると将来自己免疫疾患に移行していくケースが欧米から報告され，日本でも調査してみると同様な症例に多数遭遇するという内容でした。日常診療の中で，O.D.というとかく除外診断になりがちですが，抗体検査など細やかに調べていくと「オヤッ」と思う事があるかも知れないと感慨深く拝聴しました。特にひとりのこどもを小児期をすぎてもずーとフォローするのは開業医にしかできないという声がフロアーから上がり，参加者全員フムフムとうなづいていました。

第21回（平成11年５月13日：横浜労災病院）運動と心臓：山口県健康づくりセンター長　砂川博史先生。重度な先天性心疾患のこどもでも高度な外科的手術ときちんとした小児科医のフォローで通常の日常生活が可能である事を中心に，小児の心臓病の管理一般についてわかり易く，時にユーモアを交じえながらお話し下さいました。福岡こども病院の循環器の責任者であった経験談も御披露頂き，楽しいひとときでした。

第22回（平成11年７月14日：レストラン　KOKORO）横浜労災病院小児科症例検討会。はじめての試みとしてかねてからの懸案であった労災病院と会員の症例検討会を開催致しました。国際競技場場内のレストランで親睦会も兼ねて，フリートーキングの形でやってみました。ほとんど開業医からの紹介の症例だったので，送る側，送られる側の本音も交じえ大変有意義な一夜を過ごしたと思います。

会員の方々から要望演題や要望講師が届いています。順次，整理しながら充実した運営を計りたいと思いますので，御協力お願い致します。

（会長　中野　康伸）

中区小児科医会

第165回　6月2日

「小児の言語障害について」

横浜市中部地域療育センター所長

山崎扶佐江先生

第166回　7月23日

「小児科の眼疾患について」

－特に乳幼児健診を通じて－

横浜市中保健所　　　　塚本　光俊先生

第165回は，山崎先生より日常診察時の言語障害疑い児の見分け方，確定診断に至る検査過程，予後，耳鼻科との連携等をわかりやすく説明していただき，更に自閉症児の最新の治療方針，考え方を紹介していただきました。日常皆さんが疑問に思ってることが多いテーマだけあって，質問多数で演者が落着いて食事する時間もなく，中区医師会長に就任されたばかりの野崎先生や市大浦舟病院の相原助教授も忙中出席されまして，大変盛り上がる会となりました。

第166回は，塚本先生が豊富なスライドで小児期の眼疾患を系統だてて，視覚的にわかりやすく，明快な口調で説明してくれました。学生時代の眼科講義数時間分を一気に聞いたような気がしました。また，会場からの質問には，資料なしに発生頻度，治療成績等を数字を羅列し，説得力強く答えていただき，行政医師の力強い一面を見せてくれました。その後の懇親会では，横浜赤十字病院のO－157症例を始め，流行中の食中毒や特に中区で増加中の結核疾患，HIV感染症について，初診の開業医～治療担当の勤務医～行政管理の保健所のそれぞれの立場から意見交換がなされ，大変意義な会となりました。

今後は引き続き皆さんの協力で会を継続し，機会があれば，隣接医の小児科医会との協同主催もできればと思っています。

（蔡　誠偉）

西部小児科懇話会

横浜西部小児科懇話会は，旭，西，神奈川，保土ヶ谷，４区の約70名の会員を有し，本年７月５日におかげさまで200回をむかえることが出来ました。

第200回の記念として，横浜市立大学小児科教授横田俊平先生に，「最近の感染症の考え方，－特に結核症を中心に－。」の特別講演をお願い致しました。

新鮮な，すばらしい御講演を頂き，西部小児科懇話会の大先輩の小島先生より「２回に分けて，もう一度拝聴したいと思います。」とお便りを頂きました。

この会は，中島先生，小島先生，土橋先生，故広岡先生等諸先輩の御努力と横浜市民病院，小児科医局の諸先生方の事務局としての御尽力により，昭和40年以来今日迄，交通ストによる延期以外一回も休むことなく，原則として，隔月に講演会をもち，同時に会員諸先生の貴重な症例，御経験等を勉強して参りました。これも会員諸先生の熱意の表われと感謝しております。

33年に及ぶ懇話会200回の内容については後日まとめて御報告致します。

（会長　冠木　宏之）

南部小児科医会

磯子区，港南区，南区，の小児科医を中心に約40数名の会員で構成されており，ここのところ毎年１～２名の新入会員があり平均年齢がわずかですが下がっております。済生会南部病院，衛生看護専門学校付属病院の協力をいただき毎年，講演会，勉強会を行っております。

今年度は平成11年４月20日に衛生看護専門学校付属病院にて黒澤先生より「奇形の見方」というテーマで講演をいただきました。奇形の診断的意義とRubinstein-Taybi症候群の自験例につき概説をいただきました。６月９日には済生会南部病院にて南部小児科医会総会を行い平成10年度事業報告，会計監査ともに承認されました。総会後こども医療センター泌尿器科医長，寺島和光先生より

「小児によくみられる泌尿器科疾患」というテーマで講演をいただきました。タイトルどおり小児に頻度の多い疾患，病態につき広範囲に解説していただきました。6月21日には衛生看護専門学校付属病院にて「学校保健法の改正」「インフルエンザと合併症」のテーマで講演をいただきました。

今年度も昨年同様，常に新しい知識を吸収しながら活動する予定です。

（藤田　伸二）

南西部小児科医会

今回も，トピックスはありませんので，講演会の実績を報告致します。但し，諸般の事情により，今期間中，戸塚区では，講演会が行われませんでした。

◎泉区

横浜小児科木曜会

会場　国際親善総合病院

時間　PM７：00～８：30（毎回同時間）

ａ）演題　横浜市の結核統計とツ反及びBCGについて

講師　横浜市福祉局　香川和子先生（健康長寿部担当部長）

日時　平成11年４月15日（木）

ｂ）演題　発育期におけるスポーツ医学

講師　新村医院々長　新村一郎先生

日時　平成11年６月17日（木）

◎栄区

小児疾患地域談話会（於　横浜栄共済病院）

（A）日時　平成11年３月24日

（Ⅰ）a）病診連携を推進する為の当小児科の増床計画

b）EBウイルス感染症による伝染性単核球症の紹介例

c）重症麻疹の紹介例

梶ケ谷保彦先生

（Ⅱ）a）自宅水中分娩後に重症高張性脱水をきたした新生児例

b）小児の結核における胸部CTの有用性

片倉　茂樹先生

（Ⅲ）a）肺サーファクタントが奏効したMASの男児例

b）SSSSの紹介例

辻　聡先生

（Ⅳ）a）H.influenzaeによる髄膜炎の１例

b）亜急性壊死性リンパ節の１例

藤井　久紀先生

（B）日時　平成11年７月28日

（Ⅰ）a）アデノウイルス肺炎の紹介例

b）単純ヘルペスウイルス初感染症の紹介例

c）電子カルテの在り方と問題点

梶ケ谷保彦先生

（Ⅱ）a）エリスロポエチンに抵抗性を示した新生児メレナによる貧血の一例

b）多飲・多尿で発見された若年性糖尿病の一例　志賀健太郎先生

（Ⅲ）a）重症麻疹肺炎の一例

b）特発性血小板減少性紫斑病の一例

藤井　久紀先生

（Ⅳ）a）小児顔面神経麻痺の一例

b）追加投与として免疫グロブリン超大量療法を必要とした川崎病の一例

富田　規彦先生

（会長　内山　英男）

庶　務　報　告

1　**総会・研修会**

H11．4．16　於　横浜市健康福祉総合センター4階ホール

議事　(1)平成10年度事業報告について

(2)平成10年度決算報告について

(3)平成11年度事業計画について

(4)平成11年度予算案について

講演会「最近の感染症とその治療」

講師　砂川慶介先生（北里大学教授）

2　**常任幹事会**

H11．5．21　於　養成軒

H11．9．7　於　養成軒

3　**小児科・産科研究会（第６回）**

H11．6．25　於　横浜市健康福祉総合センター4階ホール

演題「日常診療に役立つ遺伝カウンセリングの基本」

講師　黒木　良和先生（こども医療センター院長）

4　**広報活動**

H11. 4. 1　小児科医会ニュース第18号発行

5　**その他**

サマースクール事業，横浜市中学校水泳大会への協力

6　**新役員**

会　長　三澤　孔明
副会長　有本　泰造
　　　　野崎　正之
　　　　矢崎　茂義
　　　　渡辺　昭彦
庶　務　大西　三郎
　　　　向山　秀樹
会　計　小林　幹子
広　報　富田　一彦
　　　　中野　康伸
　　　　真坂　孝二
学　術　黒住　浩子
　　　　寺道　由晃
　　　　八木　禧昭

（庶務　大西　三郎）

── 会　計　報　告（中間） ──

11年８月20日現在

現在高　3,272,762円

内訳　現金　106,785円

郵便貯金　1,951,109円

貯金センター　755,914円

※（４月総会時０－）

医師信用組合　458,954円

（会計　小林　幹子）

1999年10月１日発行
横浜市小児科医会ニュースNo.19
題字　五十嵐鐵馬
発行人　横浜市小児科医会
代表　三澤　孔明
編　集：横浜市小児科医会広報部
事務局：〒231－0849
中区麦田町４―99
Tel　622―8676（野崎方）

B52